
frontier world

フラフラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

frontier world

【Nコード】

N0162Z

【作者名】

フラフラ

【あらすじ】

2ちよつとした遊びのつもりでゲームのキャラをランダム作成した俺は、気付けばそのゲームの世界に迷い込んでいた。…ランダムの弊害で致命的にバランスの悪いキャラクターの身体で。しかし、バランスの悪さも武器になる！さあ、今日も最強目指して頑張ろう！「え、ちよつ、近距離戦は無理…こつちくん！前衛！助けてー！」

主人公は段々強くなっていく予定ですが、最初はやたら弱いです。最初の話がひと段落するころにはそこそこ最強かと。

1 / 2 / 6 Chapter 4 修正版を投稿しました。

Prologue (前書き)

ども、フラフラと申します。

更新速度は期待しないで下さい、ええ。

Prologue

―王国建暦893年。

神は、我らに大きな試練をお与えになった―

神聖大陸セイラント。

王国建暦元年以来、人々は統一された王国で変わらぬ日常を送っていた。

諸国の統一によって訪れた平和は、貴重な平穏と緩やかな停滞をもたらした。

王国建暦893年。

王国边境の都市が壊滅したとの連絡が入る。

未知の魔獣による襲撃が原因であった。

王国が支配しているのは大陸の一部であり、東方には人跡未踏の大地が広がっている。

人口と比すれば国土の広さは十分で、未開の地を開拓する労力と危険を避けていたのだ。

調査の必要性が叫ばれた。

そして、そんな声に自らの道を見いだす者たちがいた。

「冒険者」と呼ばれる彼らは、仲間を見つけ、技術を磨き、危険な秘境に踏み入っていった。

ある者は未知の鉱石を持ち返って莫大な富を築き。

ある者は太古の遺跡から不可思議な技術の産物を発見してその勇名を轟かせた。

また、多くのある者たちは凶悪な魔獣の牙にかかり。

ある者たちはその姿を消した。

「冒険者」は、栄光と危険に満ちた仕事だった。

だが、人々は前人未踏の秘境を目指した。

己こそはいつかその名を轟かせる未来の英雄だと信じて。

―そしてまた、今日も一人の青年が辺境の地に足を踏み入れる―

新作RPG、「frontier world」の、その解説文は俺を惹きつけてやまなかった。

発売される1ヶ月前からそわそわし、前日の夜に至っては遠足前の小学生もかくやという落ち着きの無さだった。

…諸事情により友達が極端に少ない俺は、昔からゲームの世話になることが多い。

特に、RPGのように「ことは別の世界にのめり込めるゲームが好きだ。

今いるこの窮屈な世界から、自由な広い世界に飛び出す感覚が何よりの楽しみである。

そんな俺にとって、自由度の高さが売りの一つであった「frontier world」は理想の新世界だったのだ。

そして、現在12月23日。

当然予約開始日に予約したそのゲームディスクは今、俺の手の中にある。

発売日である今日、家の近くのゲーム店で製品を受け取り、期待に胸を膨らませながら帰って来た。

自宅に上がった俺は、コートも脱がずにそのままテレビの前に陣取ると手にあるパッケージを開く。

現れたディスクを一撫でし、ゲームハードのスリットに差し込んだ。

オープニングムービーはスキップ、現れた選択肢から当然New Gameを選び…

「うわっ!?!?」

表示された画面にはCharacter Makingの文字。

…だったが、ボタンを連打していた俺は何も決めないうちに設定終了してしまったらしい。

画面には、A l l R a n d o m ? と表示されていた。

すぐにキャンセルしようとしたのだが…

「さてよ、全てランダムってのも面白いかもな。」

そのままY e s を選んでみることにした。

カーソルをY e s に合わせて決定。

その瞬間―

俺の視界は強烈な光で真っ白になり…

俺の住む狭い部屋の中から、人の影が消えたのだった。

人影の無い室内。

点けっぱなしのテレビは、一つの警告文を表示し続けていた。

ーランダム作成は、コンピューターを使った完全なランダムでの作業なために、致命的なレベルでバランスの悪いキャラクターが作られる場合がありますー

ーでは、あなたの冒険者生活に神のお導きがあらんことをー

Chapter 1

空が、青い。

どこか遠くの空で鳴いているだろう鳥の鳴き声を聞きながら思った。

穏やかな風に辺りの草原の下草がサラサラと揺れている。

そこまでの情報をぼんやりと処理した俺の脳は、そこでようやく本格稼働を始めたらしい。

…ここ、どこだ？

何故か節々が痛む体を起こし、周囲を見回す。

前―だだっ広い草原。

右―だだっ広い草原。

左―だだっ広い草原。

後ろ―だだっ広い草原。

結論―俺はだだっ広い草原にいる。

…現状の整理を試みたが、何の発見もなかった。

どうなってる？

俺は確か自分の部屋でゲームを始めようとしていたはずだ。

面白半分にランダムでキャラクターを作ったのも覚えている。

それが、どんな経緯を辿ったら草原に寝っ転がって眠りこけてる状態になるんだ？

混乱状態の俺だったが、とりあえず立ち上がるうと尻を浮かし…

そこでようやく自分の状態に気づいた。

「服が…変わってる？」

思わず声が漏れる。

今日の俺の服装は、いつも通りのジーンズにシャツだったはずだ。

断じてこんな革製の手甲なんてつけていなかった。

ついでにいえば革手袋なんてしてなかったし、体にもこんな…胴鎧？みたいなものは着ていなかった。

同じような意匠の革ブーツも同様である。

なんだ？狐…というには洋風趣味なので妖精にでも化かされたか？

しかし…この鎧、初めて見たけど見たことあるような…？

うん。

何だったかなあ〜？

…まあいいか。

俺はあっさりと悩むのを止めた。

ここがどこかも何が起こったのかも分からないのだ。

服なんか後で良からう。

よく考えてみると、こんな不可思議な状態なのに特に慌てる事もなくのんびりと考え込んでいるこの状況が既に異常だった。

だが、不思議と違和感はない。

何故ここにいるのかは知らないが、なるべくしてなったような気がするのだ。

…もちろん、只の現実逃避という可能性もあるが。

と、思考がそこまで迷走したところでようやく一つ有用な情報を思い出した。

この服装…さつきまでやってきた（正式には始めようとしていた）ゲームである「frontier world」の主人公の初期装備じゃないか？

このやたらと凝った装飾の入った手甲なんか見覚えがある気がする。

そしてこの胴鎧、形状から配色まで記憶と一致する。

間違いない、あのゲームの初期装備は全て革製で、こんな感じだったはずだ。

後は各種ステータスに割り振った初期選択ポイントによってキャラクターの得意、不得意、そしてなにより初期武器が決まったはずなのだが。

今いる場所を「frontier world」だと仮定して…少し解説を入れよう。

「frontier world」には最初から決まった職業だとか戦闘タイプは無い。

プレイヤーには最初に100ポイントのステータスポイントが与えられ、そのポイントを幾つかの選択肢に割り振る事でそのキャラクターの得意、不得意を決めるのだ。

例えば、前線で剣を振るう戦士を目指すのならば、物理攻撃力にボーナスを持つ筋力、「str」という選択肢に多めのポイントを割り振る事になる。

この際重要なのは、ポイントを極端に割り振ったところで初期の数値は他よりは高い程度であるということだ。

ステータスポイントはあくまで「適性」を決める儀式であるから、最初から極端に高いステータスを持つ事は無い。

当然、「str」にポイントを極振りすれば、そのキャラクターが成長するに連れて恐ろしい勢いで筋力、つまり物理攻撃力が上がっ

ていくだろうが、逆にその他のステータスは伸び悩むだろう。

「frontier world」において完全なキャラクターは存在しないのだ。解説終わり。

…気づいたら見知らぬ場所で、ついでにいつの間にかさつき始めようとしたゲームの服装となれば、ステータスとか武器とかもゲームの通りってオチなのか…？

……。

おいおい勘弁してくれよ、ただでさえ初期の装備とステータスなんかで突然放り出されて不安どころじゃないってのに…

どーしよ、ランダム作成だよ。

しかし…本当にゲームと関係があるのか？

偶然、同じような服装っただけでは…

…いや、そもそも何でこんな格好なのかも…というかほとんど全てが分からないのだ。

全く何もかも分からない状況よりはある程度の前情報があるゲームと同じ世界だと考えたほうが都合がいい。

違っつて証拠が見つかるまで暫定的に「frontier world」に迷い込んだと考えよう。

そうと決まればまずはステータスの確認か。

…あれ？ステータスってどうやって調べるんだ？

取りあえず。

「ステータス！」

「開けステータス！」

「ステータスウィンドウ！」

「オープンステータス！」

「ボタン！」

…色々試してみたものの、恥ずかしいだけに終わった。

自分の得意、不得意が分からないってゲームでは致命的じゃないか？

打たれ強い戦士タイプだったらいいが、魔術師タイプみたいな後衛型だったら目も当てられない。

障害物も何も無い草原で紙防御の魔術師一人は流石に勘弁して欲しい。

ゲームの世界ならば間違いなくモンスター、つまり敵がいるはずなのだから。

ポイントの割り振りが前衛タイプならば高い（だろう）身体能力で逃げるなりぶっ叩くなり出来るだろうが、後衛型ならばそれらの選

択肢は厳しいだろう。

ただっ広い草原じゃ、隠れる事も出来ないだろうし…

そもそも魔法なんて使える自信が無い。

使う才能…というか能力があったとしても、使い方もわからん魔法なんかで戦闘がこなせるとは思えない。

いや、悲観的思考は止めよう。

もしかしたらとんでもない身体能力が備わっているかもしれないし。

…まあ、なるようになるさ。

難しく考えるのを止めた俺は、東京じゃ見たことも無い真っ青な広い空に向かって大きく伸びをした。

と、そこで気づいた事があった。

「ん？」

なんだろう。

背中に違和感がある。

後ろに手を回してみると、硬い感触。

…あれ？俺さっきまで背中下にして寝てたよな。

という疑問はまあ、あとにする。

もしかして…剣か!?

身を守る事の出来る武器が手には入れればかなり心強い。

慌てて自分の体をよく見ると、太めの革紐が肩から右肩から左の腰辺りに抜けている。

革紐を回すように背後の物を目の前に持つてくると…

「ゆ、弓…。」

弓だった。

より詳しく描写すると、古ぼけた木製の弓。

…弦、切れかかってないか？

こんな武器で生き延びろってことか…？

いや、しかし仮にも主人公の武器だ。

それだけでは無いはず…だよな？

と、呆然としていた俺の耳に、不思議な音が届いた。

ーポーンー

続いて目の前に浮かび上がる半透明の文字列。

―サクトは《古ぼけた安物の木製弓》を入手した―

―全ての初期アイテムが揃った―

…え、なにそれ怖い。

俺は無意識に呟いたのだった。

Chapter 2

手に入れた武器のあまりの貧弱さにしばしトリップしていた俺だったが、数分後に再起動した。

「ま、まあ、無いよりマシだし？むしろ遠距離から無双出来るかも
しれないし？」

…自分で言つて悲しくなってきた。

「frontier world」も元々ゲームであるからして、
発売前にテストがあつた。

…まあ、普通はテストといえばネットゲームがするものだが、「
frontier world」はかなりの製作費をかけた大作だ
つたため、失敗が許されなかつたのだろう。

当然、俺も応募したものの選ばれることはなく、幸運にもテスト
プレイヤーに選ばれた人々の多くがネット上に載せた様々な評価や
事前情報を眺めていた。

俺の「frontier world」の少ない知識はここからき
ているのだ。

その情報の中に、一つの定説がある。

すなわち―

弓って最弱じゃね？（笑）

剣と魔法のこの世界での弓の位置付けは、悲しいくらい中途半端な武器だった。

弓であるから近接戦は不可能だし、射程距離は長距離魔法に負ける。

一撃の威力は攻撃魔法と比べものにならず（当然低い）、汎用性や対応力に至ってはもう笑うしかない。

弓に矢を飛ばす以外の使い道なんてないし。

はあ。

手に持つ弓を眺めてみるが、当然どんなに眺めても変化などあるはずもない。

「はあ。…せめてこの弓の性能がわかれば…いや、普通の弓つおあつ！」

最後の奇声は目の前に現れたやつぱり半透明の文字列に対するものだ。

「《古ぼけた安物の木製弓》」

その名の通りのボロい弓。弓として最低限の機能を持つ一品。まあ、最低限の機能しか持たないとも言える。まずは矢の調達から始めよう。

「矢はついてねーのかよ!!」

突っ込んだ。

全力だった。

何だろう、確かに気づいてみると弓しかない。

弓矢、じゃないただの弓だ。

解説文には悪意を感じるし。

あれ？目から汗が……

「はぁ……」

俺は、本日三回目のため息をこぼしながらひたすら草原を歩いていった。

進んでも進んでも景色は変わらないが、前には進んでいるはずだ。

多分。

爽やかな気分などどつくに過ぎ去り、青い空も忌々しいだけのものになってきている。

雨空よりはマシなんだろうが。

ぼんやりと取り留めもない事を考えながら機械的に歩き続けている。

全く…何でこんな事になったんだか。

持ってた武器は役立た…ず…？

「なんだ？」

目の前が揺らいでいる。

見たところ、俺の前…どのくらい離れているのか分からないがとにかく前方の空間が揺らいでいた。

よくよく見ないと分からない小さなさざ波が、何も無い空間の一点を中心に二次元的に走っているようだ。

揺らいでいる空間の先は今まで通り無限に続く草原が広がっていた。

なんとなく辺りを見回した俺は、ゆっくりと近づくと手に持った弓の先を近づけてみる。

「うわっ！？」

何の前触れもなく弓の先端少しが消える。

慌てて引き戻すと弓の先端も現れた。

ふーむ。

少々勇気を出して、今度は指を差し込む。

特に痛みも無く揺らぎを通り抜けた俺の指は、やはり消えたように見える。

これはつまり、別の空間に繋がっているという事なのだろうか？

意を決して、頭を突っ込んだ。

思わず目をつむってしまい、そのまま何歩か進む。

そして、ゆっくり目を開くと…

「…今度は森の中かよ。」

森だった。

誰がどう見ても完璧に。

そこら中に高い木が生え、足元は湿った落ち葉と土。

所々に毒々しい赤やら黄色のキノコが顔を出している。

…あれ？状況悪化してないか？

い、いや。とにかくあの無限の草原から脱出出来たんだ。

大きな進歩だろう。

そう、例え正面からピンク色の巨大熊が走って来ていても。

ははは、そうさ。きっとあの熊は寂しがり屋なんだな。

久し振りの人間に興奮しちゃったんだな。

…まあ、あの雰囲気を見るに「人間」と書いて「エサ」と読みそうだが。

うん、逃げよ。

「ぎゃあああー！ー！ー！」

「グオオオー！ー！ー！」

ヤバい、超怖い。

どンドン距離詰めてくるっ！

「こっち来んなアーツ！」

「グルオオオー！ー！ー！」

「お返事ありがとオー！ー！ー！」

マズい、息が続かない。

そろそろ限界だ。

やっと草原を出れたのになんて仕打ちだ。

「ッ……！ハッ……ハッ……ま、ずい……」

死んでたまるかよ！

俺は、最後の攻撃に出るために息を整え始めた。

え？前のはいつかって？

気にしない気にしない。

さて、さっきよりだいぶ距離を詰められたがこっちの準備も整った。

いくぞ！

せーの！

「たーすーけーてー！！！」

うん、まあ助けを呼ぶくらいしか出来ないんだけどね。

「グルオオオ……！！！」

「ええい！お前に言ったんじゃないやい！」

熊に向かって叫び返ししながら再び速度を上げて走り出す俺。

既にドツドツという熊の足音がはっきりと聞こえる。

そして…

「ッ！」

ゴオッ！

風切り音にとっさに転がると、耳元をピンク色の暴力が抜けていった。

追いつかれたか。

逃走の無駄を悟った俺は、後ろを振り向きピンク熊と相対する。

俺の行動に対し、ぐるぐると喉を鳴らして唸りつつ身構える熊。

正直チビりそうだが、ゆっくりと身を屈める。

目は熊の顔を睨み付けたまま（虚勢）、手先で地面を探る。

ジリジリと近づいてくる熊から慎重に距離を保ちつつ、俺は背中から《古ぼけた安物の木製弓》を引き出した。

熊に向かって慎重に構え、拾った石を弦に当てる。

…キリキリキリ…

集中…集中…

転ばないよう細心の注意を払いながら後ろに下がり続ける。

同時に、熊の目に狙いを付けた。

不意に、熊がその場に止まる。

俺も足を止め、弓での狙いに全ての神経を傾ける。

飛びかかろうとしたのか、熊がほんの少しだけ身体を沈ませた。

その瞬間――

ビシュッ!!

俺は石を放った。

石は、思った以上に真つすぐに綺麗な軌道で空を切り裂き…

熊の眉間にぶち当たった。

ゴッ、という鈍い音が響き、熊は……

「グルルオオオー!!」

怒った。

…残念、ここで目を潰せれば相手は野生動物だ。

逃げてくれるかもしれないな。ただどなたか。

どこか達観したような諦めの心境。

俺は、熊がぶんぶん頭を振った後、怒りの色もあらわにこっちに
向き直るのを見ていた。

熊は、四本の足をたわめ、俺に飛びかかろうとし……

俺の目の前に銀光が走った。

「グ……ルル……オ……」

呆然と立ち尽くす俺を最後に睨んだ熊は、弱々しい末期の声を上げて
前に突っ伏すように崩れ落ちた。

倒れた熊の背後には、いつの間にか鎧の塊が立っていたのだった。

Chapter 3

放心状態の俺は、そいつが手に持っていた剣を腰の鞘に納めるのを呆然としたまま眺めていた。

ふと、違和感を感じて足元を見ると、倒れた熊から溢れ出た血溜まりが俺のブーツの先端に達している。

足を引くと、ピチャリと音を立てて流れるその紅が、吹っ飛んだままだった俺の心を引き戻した。

「大丈夫だったか？」

再び視線を上げると、剣を納めた男がこちらへ歩み寄ってきた。

全身を覆う金属製の装甲みたいな板金プレート鎧アーマーが差し込む陽光を鈍く跳ね返している。

顔はフルフェイスの兜に遮られて分からない。

俺と同じ位の身長で、男にしては高めの声だった。

「あ、ああ…助かった。ありがとう。」

とりあえず、礼。

「…構わない。依頼を終わらせた帰り道だ。」

「依頼？」

「…なんだ？この森にいるって事はお前も冒険者なのだろう？」

「いやいや、俺は違うよ。俺は……えーっと……」

不味い、俺ってどんな立場なんだ？

「…大丈夫か？」

男が怪訝な感じで聞いてくる。

……仕方が無い、こうなったらあれしかない。

「…あー、悪い。自分が誰だか分からないんだ。」

「…なんだと？」

「気づいたら見たこともない馬鹿でかい草原にいてな？歩いてたらいつの間にかこの森に迷い込んで、偶然あのピンク色の熊に襲われたんだよ。」

…自分で言ってるって怪しいにも程がある。

……でも、結構ホントのことなんだよなあ。

だが、驚いた事に鎧男はそれである程度納得したようだった。

「…成る程。《忘却の草原》に巻き込まれたのか。…災難だったな。」

「忘却の…草原？」

なんだよそりゃ？

「…世界各地で稀に見られる現象だ。巻き込まれた者は皆一様に同じ事を言う。…つまり、自分には記憶が無く、気づけばどこまでも続く草原にいた、とな。」

「何でそんな事が？」

「…さあな。なにしろ巻き込まれた奴は皆記憶が無い。分かっているのは時々珍しい物を掴まされて帰ってくる者がいるって事くらいだ。」

「？」

「…俺も詳しくは知らん。ただ、そのように伝わっているというだけだ。」

「へー。…ん、珍しい物ね。」

俺は何となく手に握っていた弓に目を落とした。

…まさか、なあ？

いやでも「珍しい物」ではあるのかも。

「使えるもの」とか「強いもの」は諦めなきゃだけど。

…一応、もう一度あのふざけた解説文をよんでおくか。

俺は、弓に意識を向けながら頭の中で「性能」と念じる。

すると――

――《古ぼけた不思議な弓》――

古びた見た目の木製弓。見た目に反してある程度安定した性能を持つ。使用者の魔力を矢に付与できる特殊能力付きの《幻想武器》でもある。でも、やっぱり矢は自己調達。

……おや？

何か変わってないか？

さっきまでは《古ぼけた安物の木製弓》だったような……

「……何かあったのか？」

おっと、この人を忘れてた。

「あ、うん。……あのー、武具の名前とか性能が変わる事ってあるのかな？」

「ふむ……。……無い事は無い、はずだ。一部の貴重な武具にはそのような現象が起こる場合もあると聞く。」

「き、貴重な武具……。」

この悪意満載の弓がか？

矢すらついて無いんだぞ。

でもまあ、確かに矢さえ手に入ればこの弓でも戦えるかも。

…正直、目の前で熊が斬り殺された時には気分が悪くなったが、生きていくのに必要な命を奪う行為に対しての忌避感はない。

人の命ともなれば別かも知れないが…まあそこところはまた後だ。

うん、とにかく何としても生きていくしかないな。

と、俺が思考を一段落させて顔を上げると。

鎧男がこちらを見つめていた。

いや、当然彼の頭は金属に包まれているので視線はわからないが…
どうも、こちらを見ながら考え込んでいる様子だ。

と、俺が人間観察をしていると彼も頭の整理をし終わったようだ。

(実際に見えたのは鉄の塊が僅かに動く様子だけだが。)

「…俺が街までは送ってやる。」

はい？

「いや、《忘却の草原》に巻き込まれたとなれば何も分からないだ

ろっし、知り合いもいまい。」

「…いや、そりゃあ…俺としてはありがたいけども。」

街にいつてもなあ。

でもまあこんな危ない所にいるよりマシか。

「よし、お願いしまーす。」

「ああ。…街までだが、よろしく。俺は…トワイライト。適当に呼んでくれて構わない。」

「こちらこそどーぞよろしく。サクト・カゲマツだ。」

「…では、カゲマツ。街に向かおうか。」

「よろしくお願いしまーす。」

トワイライトと名乗った鎧男と街まで行くことになった俺は、道を歩き続けながら彼と会話を続ける。

「ふ〜ん。じゃあやっぱり、俺のこの《古ぼけた不思議な木製弓》って珍しいもんなのかな？」

「…まあ、《幻想武具》というだけである程度の価値は保証されているだろうな。」

「《幻想武具》ってのは？」

「…不思議な力を持つ魔法の武具だ。運が良ければ中堅冒険者が持てるものから、それこそ伝説の勇者がつかうような物もある。」

「ほう。なかなか便利そうだな。」

「…初心者冒険者の中には《幻想武具》を手に入れる事を最初の目標にしているものも多い。…まあ、そういう奴らは大抵欲をかい死ぬがな。」

「はははは。」

なかなかシビアな世界のようにだ。…ま、当然といえば当然だろう。

命のやり取りをする仕事だろうからな。

「そーだ。あんたに聞きたい事があつたんだ。」

「…今までもずっと解説していたろう。…まあ、いいが。」

すみませんね、なんか。

トワイライトと名乗るこの男、見た目は威圧感バリバリだし少々無愛想だが意外といい人のようだった。

「それじゃあ聞くけど。…正直なところ、街に着いたらどうすればい

「いと思う?」

「ふむ…。それはまた難しい質問だな。…記憶を失う前は何をしていたか覚えていないか?」

「…学生…かも知れない。何かを学んでいた気が…いや、やっぱり分からない。」

まあバリバリ大学生でしたけどね。

「…学生、か。学院と言えば普通は魔法学校をさすが…それならば弓を受けた理由にならんか。…《忘却の草原》は全く関係の無い物を与えないそうだから。」

…どんなステータスポイント振り分けになったんだろうな、俺。

「…俺が面倒を見てやる、と言いたい所だが…故あってそれは出来ん。街からは何とかしてもらおうしかないな。」

「…まあ、そうだよなあ。でも俺としては街まで護衛して貰えるだけで十分ありがたいよ。」

「…そうか。」

まあ大丈夫。

何とかするぞ。

Chapter 4

謎の鎧男（笑）トワイライトに命を助けられた後、ポツリポツリと言葉を交わしながら歩き続けた俺は今巨大な街壁の前に立っていた。

「ゼー、ゼー、ゲホッ！」

「…お前、体力無いな。」

…息も絶え絶えで。

「ゼー、ゼー、あ、あんたが、体力、有りすぎなんだよ…歩くのは、やっ…」

「…わかった、わかったからとりあえず息を整えろ。」

～休憩中～

「ほほう。ここが始まりの街…」

「…開拓街アドウエルだ。さっき教えたるっ。」

「いや、何か気分で…ま、ここまで送ってくれてありがとな。後は自分で何とかするわ。」

「…焦るな。協会位になら連れてってやる。」

「いや、俺宗教はちょっと。」

「…馬鹿者。「教会」じゃない、「協会」だ。正式名称は冒険者管理支援協会アドウェル支部。…略して協会、だ。」

「何それ？」

ゲームの…俺の知る「frontier world」にそんなの
あつたか？

いや、待てよ…？

「…トワイライト、冒険者ギルドってあるか？」

俺がそう尋ねると、隣の男は本気で驚いたようだった。

「…冒険者…ギルド、だと？」

「…え、俺何か変な事言った？」

「…いや、協会は冒険者ギルドの後身だ。冒険者ギルド、という呼び方は百年前程に廃れている。」

「え？」

…なんだそりゃ？

「さて、今って西れ…王国建暦何年だ？」

「…今年は確か…1061年だったか。」

……おい。

俺の知ってるこの世界は王国建暦920年前後なんだが……。

「…不思議な奴だな。まあいい、協会に向かおう。」

「…うーい。」

前途多難とはこのことが、まったく。

「賑わってるな。」

「…この辺りではそこそこ大きな街だからな。人口は高いし商人もやってくる。」

開拓街アドウエル、と呼ばれた街は「frontier world」には存在しなかったはずだ。

つまり、この街は出来てから約100年以内なわけか。

何の約にも立たない考察をしつつ、街を進む。

ほとんどの建築物は石造りで寒々しい印象だが、石畳の大路のあちこちに立つ露店がそれを相殺している。

建物の間に引かれた真っ直ぐな道には剣を背負ったゴツい男の二人組だの猫耳付けた少女だのが行き交い、鎧を纏った集団が樽に入っただ何かを運んでいた。

…あれ酒か？

そういえばしばらく何にも食べてないような…

「な、なあトワイライト、ちょっとどこか店に…」

「駄目だ。まずは協会に向かうぞ。」

「…さいですか。」

若干テンションの下がった俺が連れて来られたのはこれまた石造りの建物だった。

ここに来るまでに通り過ぎたたくさんの建物もほとんど石造りだし、やはり石造りの建築が発達してるのかねえ？

ついでに言えばほとんどの建物は同一の規格で造られているらしく、どれも似たような石の箱だった。

今日の前にあるこの建物も、身体を丸めた竜の意匠が染め抜かれた旗が翻っている以外は同じだ。

異世界情緒に浸っている俺を尻目にさっさと扉を開けて入っていく

トワイライト。

俺は慌てて後を追う。

「…あれ？」

ギルド…じゃなく協会の中は酒場になっていて、気の荒い冒険者達が酒を交わしている…のを想像していたのだが。

「むしろ銀行？…ロマンが…」

整然と並んだカウンターに暇そうなお姉さんが数人立っていた。

トワイライトはすたすと最寄りのお姉さんに近づくと声をかけた。

「…依頼を完了した。」

「あ、はい。トワイライトさんですね。報告が来ていますよ。」

受付らしいお姉さんは足元をゴソゴソ探る。

「あ、あった。…どうぞ、報酬の大銀貨三枚です。」

「…確かに。それで、今日は新人の登録をしたいのだが。」

「大丈夫ですよー。あら？彼がその？」

「…ああ。来てくれ。」

呼ばれたので二人の元に向かう。

どうでもいいけど結構仲良さそうだなこの二人。

「あー、どうも。サクト・カゲマツです。…よろしく?」

一応敬語を使う。

「はい、よろしく。それじゃ、この紙に名前を書いて。………ん、よし。それじゃあこっち来てね。」

…驚いた。

自分の名前を書こうとしたら、見たことも無い文字に変化した。

自分では確かに「影末咲人」と漢字で書いたつもりだったが、
(よく考えるとこの

世界で漢字が通じる可能性ってあるのか?)俺の手が実際に書き出したのはぐにやぐにやした妙な文字だった。

受付のお姉さんの様子を見るに、この世界での文字のようだ。

文字を覚える必要が無いのはありがたいが…少々気持ち悪いな。

「どづしたの〜?こっちよ〜。」

…二人が仲良さそうなのは、このお姉さんがフレンドリーなだけか。

そんな事を考えながらお姉さんについていくと…

「…何ですコレ？」

「あら？知らない？ステータス測定器。」

「え？ステータスがわかるんですか！？」

ただの鉄の箱にしか見えないんだが。

「それじゃあここに手を置いて。…はい、いいわよ。」

「早くないすか！？」

思わず突っ込んだ俺。

しかし…どんなステータスになってるんだか見るのが怖いな。

カラン！

「ん？」

気づくと足元に金属製のプレートが落ちていた。

だいたい親指くらいのサイズのそれを拾ってみる。

「それがあなたのステータス。そのまま、開け、とかステータス、とか念じればステータスがみられるわ。…ほら、先生がお待ちよ。」

「あ、はい。ありがとうございます。…先生ってなんです？」

「あら？君、彼の弟子じゃないの？まあいいわ。ほら、行きなさい。」

「
ひらひらと手を振るお姉さんに礼をいい、トワイライトのもとへ向かう。」

「…どうだ。自分の適性は分かったか？」

「ん、まだ見てない。…ステータス。」

俺の前に慣れてきた感のある半透明の文字列が現れる。

どれどれ…？

```
str (筋力)      | 7  
vit (体力)      | 2  
agi (敏捷)      | 9  
int (魔力放出量) | 0  
wis (魔力展開量) | 50 + 50 = 100  
spi (魔力循環量) | 30  
mp (保有魔力量)  | unlimited
```

固有スキル

マジッククラスター
《魔力塊》

Wisステータスに+50

発生スキル

ザ・マジック
《完全魔力》

保有魔力量無限化

発生条件

Wisステータス100到達

…なんぞこりゃ？

俺が錆び付いた機械のような動きでトワイライトを振り向くと、彼もまた同じ用な動きで見返してきた。

…全身鎧男がやると妙にしっくりくるな。

「なあ、どういう事だと思う？」

「…見たままだろう。が、強いて言うならとんでもなくもつたいな
いステータスと言うべきだな。」

「…その心は？」

「保有魔力量は…ちょっと信じられないが無限らしいのに、魔力放出量…つまり魔法を放つ才能がゼロだ。」

「もしかしなくても魔術師には…」

「…なれないな。筋力、体力、敏捷はそのままだからいいとして…魔力放出量というのは体外で魔法を構築し放つ才能をさす。つまり、一般的な《電撃》^{サンダーボルト}なんかのことだな。魔法の大きな部分を占める放出系魔法は使えないと思っていいだろう。これに対して…やはり信じられないが100に達している魔力展開量、これは《魔力小盾》^{スモールシールド}のように体表に魔力を纏うタイプの魔法の才能だ。…防御に関しては無敵だろうな。他には、保有魔力量にも関係している。体に触れているものに魔力を纏わせて強化する付与魔法も魔力展開量だな。」

ま、魔法の大部分が使用不可…

だが、攻撃を受けなければ負けることはないッ！

それを踏まえた結論は。

「ほほう。つまり俺無敵、と？」

「…お前が防御魔法を構築し終わるのを待ってくれる敵ばかりならな。」

…その発想は無かった。

「いいか？…最後に魔力循環量、だ。これは魔力による身体強化と自分の体の治癒、自然回復力に関わる。30…なる程、これだけあれば魔力による身体強化で前線として戦う事も可能だろうな。」

「…前線はちよっと勘弁かなあ。」

「…そうか。まあ、お前の戦闘スタイルまでは俺も面倒を見切れない。…すまないが、な。」

「いーって。ここまで連れて来てくれただけで。」

見ず知らずの相手に対する対応としてはお人好しと言ってもいい対応だった。

…これ以上甘える訳にもいかないだろう。

暗くなってしまった空気を戻すべく話題のきっかけを探す。

「あ、あれ？トワイライト、その手に持っている紙は何だ？」

「…これか？」

受け取る。

なにになに？

「えー、我が社の製品は栄養バランスを最大限に考慮し、疲れた現代人に究極の栄養補給を…ってなんだこりゃ？…疲れてんのか、トワイライト？」

そう言つて、紙面から視線を戻すと、呆然とした顔…いや、様子で俺を凝視…だと思う…する鎧男の姿があった。

…今度は何さ。

Chapter 5

「えーっと…秘密だったのか？疲れてるの？」

悪い事したかな？

「…何と、言った？」

やだなあ、雰囲気と口調がマジですぜ、旦那。

「…カゲマツ、何と言ったのだ？」

「ちよつ、口調が怖いから！…あの、すいませんでした。」

「何に謝っている、そんなのはどうでもいい。お前、この紙の内容を読んだ、いや、読めた（・・・）のか？」

「へ？いやそりゃ読めるだろ。だってこれ日本語…あつ！」

そうだ、この世界の文字がさつき名前を書いた時に自動変換された文字ならば、この世界の人間が日本語を知るはずがない。

…待て、そうじゃない。

問題の本質はそこじゃない。

最大の疑問は、なぜこの世界に日本語が存在するのかわかるのかという事だ。

「トワイライト、この紙どこから手に入れた？」

「…私の質問に答えるカゲマツ…！お前、なぜこの文字が読める！」
「そつちこそ教える。この紙…いや、この文字は何なんだ？……つて、え？私？」

「…っ！？……これでは話が進まないな。カゲマツ、今夜は俺が宿をとつてやる。そこで話をしよう。…互いに聞きたい事がありそうだしな。」

「…ああ、助かる。」

「…行こう。夜になる前に部屋を取りたい。」

「わかった。そんなら行こうか。」

約一時間後、俺とトワイライトは宿を取り、俺の部屋に集まっていた。

「…別に二部屋取らなくても良かったんだが。俺は適当に椅子とかで寝るし。」

「…別にこのくらいの金なら何の問題も無い。それより、本題にはいるぞ。」

「ん、わかった。まあ、礼儀として俺から話そう。…構わないか？」

「…ああ、助かる。一通り話を聞いて情報を整理してからお前の質問に答えよう。」

「十分だ。…さて、始めに結論から言うのだ、俺はこの文字自体は知っているし、何の問題もなく読める（・・・）。」

「…そうか。ようやく…いや、続けてくれ。」

「あ、ああ。…何でこの文字を知っているのか、とかどこで知ったのか、っていう質問は勘弁して欲しいんだが…」

「…気にならない事も無いが、まあ俺たちは基本的に知り合ったばかりだ。…話せない事もあって当然だろう。ただ、この紙に書いてある内容については詳しく教えて欲しい。」

「ああ。それなら構わないぞ。…んーつとだな、まあ、単純に言えば宣伝文だな。」

「…宣伝分とは…また予想外のものだな。」

「疲れた現代人に究極の栄養補給を…つまり、毎日仕事が大変でしつかりとした食事がとれない人向けの栄養を豊富に持たせた人口的な何らかの食品…だと思っただが。」

「…？なぜ明言しない？」

「文が途中で切れてるんだよ。大事な事が常に一番最後に来る珍し

い言語だからな、にほ……この言語は。」

「ああ、その続きなら持っている。…これだ。」

渡される2枚目の紙。

なにになに？

………？

これ、日本語じゃないぞ。

「トワイライト、これは違う言語だぞ。」

俺が指摘すると、奴は再び驚いたようだった。

…なんか、だんだんわかるようになってきたな。

ちなみに、今までの表現でわかるようにこの鎧男は室内でも全身鎧のままだ。

…重くないのかな？

「…すまない。本当の2枚目はこっちだった。」

そう言つて、2枚目を差し出すトワイライト。

ん、よし。今度は日本語だな。

「……なる程。うん、栄養ドリンクだな。つまりこの文……二枚合わ

せた文の内容は、忙しくて栄養補給がなかなか十分に出来ない人向けの、人間に必要な栄養素を人口的に集めた飲み物を売るための宣伝文って事だ。…ご理解いただけただけかな？」

「……そうか。ありがとう。」

トワイライトはそう呟くように言うと、考え込むように黙ってしまった。

「気まずい…という程ではないが、少し居づらい雰囲気は辺りに満ちる。」

うん、暇だ。

俺は、とりあえずの暇潰しに自分のステータスを見直す事にしたのだった。

しかし…見れば見るほどバランスの最悪なステータスである。

「本当はカッコ良く呪文を唱えて魔法を使ってみたかったりしたんだが…」

ん？中学二年生？

何の事かな？

…まあ、とりあえずの方針としては、弓を使ってみるか。

というより他に道は無い気がする。

…異世界に来てまで苦労すんなあ、俺。

と、俺が自分の境遇に涙していると。

「…すまない。待たせたか？」

お、トワイライトが復活した。

「いや。じゃあ、次はこっちが聞いて良いかな？ 《忘却の草原》
帰りなもんだから色々わからないんだが。」

「ああ。朝まででも付き合おう。…俺にも得るものがありそうだし
な。」

ちよつと、聞きましたかアナタ？

朝まで付き合ってますって。

…これで言った相手が鎧男じゃなくて綺麗なおねーさんなら狂喜乱
舞なんだがなあ。

ま、世の中そんなにうまくは行かないか。

「…む？何だか理不尽に恨まれて勝手に納得された気がしたぞ。」

気のせいです。

「よし、んじゃあトワイライト。とりあえずまずはどこでこの紙を
見つけたのか聞いてもいいか？」

「…構わない。と、いうより紙はただの紙だ。文章は…とある遺跡に落ちていた不思議な物質に書いてあったものだぞ。」

「不思議な物質？」

「うむ、半透明の膜状の物質で、引つ張ると伸びるがなかなか丈夫であり、火に落としたところ妙な臭いを発しながら縮れるように小さくなって燃え尽きたとか。」

あ、多分ビニールだ。

「…ふーん。ちなみに、その遺跡ってのは？」

「教えるのは構わない。ただ、記憶が不完全なお前にわかるとは思わないが？」

「それもそうか。…しかし、遺跡ねえ。」

今度は俺が考え込む。

すると、トワイライトは言った。

「…カゲマツ。俺と契約をしないか？」

「契約？そういうのって普通は悪魔だとか精霊だとかとするもんじやないのか？」

こんなファンタジーな世界なわけだし。

「…何を言っている？俺が言っているのは普通の雇用契約みたいな

ものだが。」

…ちえつ、夢の無い。

「…つまり、お前が俺にこの言語を教えつつ俺が頼んだ文を翻訳し、俺はお前にこの世界の事を教えつつ生きる術を教え込む。…どうだ？もちろん、断るもお前の自由だが。断ったからといって部屋から追い出したりもしないしな。」

「ほう。…少し考えてもいいか？」

「…明日の朝までに頼む。」

「いや、今夜中に出す。」

提案を受けた場合のメリットは？

決まってる。常識を知るための教師と生きていくための教師がいつペンに手に入る。

では、デメリットは？

…特に思いつかないな。

うん、受けてもいいだろう。

ただし、一つくらい条件を付けさせてもらうか。

「…その提案、受けようと思う…」が。」

「…何だ？」

「相手の顔も見ずに契約したくない。契約は必ず受けるから…その前に、パートナーの顔くらい見せてくれない？」

「……………」

え、何その無言？

「…まあ、俺…いや、私が提案した側だし、そのくらいの譲歩は必要か。…いいだろう。」

あれ？また私って…

トワイライトは、両手を自分の兜に添えると一気に引き抜いた。

露わになる素顔。

それを見て俺は…

「…た、大変だ。暑苦しい鎧男が綺麗なおねーさんになった…」

「…………お前さつきまで私の事をそんな風に思ってたのか。」

突然目の前に現れた銀髪を煌めかせる鎧美人は、不機嫌そうにそう言ったのだった。

Chapter 6

俺は、不覚にも目の前の美人に完全に見とれてしまっていた。

「…おい。」

サラサラと流れる輝くような銀髪。

「…聞いているのか？」

生まれてこの方日の光に当たった事が無いかのような白く綺麗な肌。

「…おい、いい加減に返事をしろ。」

顔立ちは信じられないくらい繊細に整い、不機嫌そうな紅い瞳がこちらを睨んでいた。

…結論、やっぱり凄い美人。

と、その美人が俺に向かって腕を伸ばして来て…

「いだっ！！」

殴られた。

鎧付きの腕で。

「いい加減に話を聞けと言っている！！」

「あ…悪い。んで？何だつて？」

完全に呆けていた。

「契約締結はいいが、他に聞く事は無いのかと言ったんだ。…無いなら私は部屋に戻るぞ。これ以上話す事も無いしな。」

「…仮にもしばらくコンビ組もうって相手にそれはどうなのよ、人間として。」

「別に、ただ利害が一時的に一致したに過ぎん。…だいたい、私は人じゃない。」

「は？」

衝撃の事実が発覚した。

え？人じゃないってどゆこと？

「ハイエルフだ私は！…見ればわかるだろう。」

「ん？本当だ！耳が尖ってる！」

「おい！近い、近いっ！…このっ。」

ゴスッ！

「痛った！え？殴んなくてもいいだろ！」

「自業自得だ。…おい、聞く事は無いんだな。」

「待て待てっ！あの文字についても少し聞きたい。」

嫌そうな表情の彼女が本当に今にも部屋に帰ろうとしたため、慌てて引き止める。

「…何だ？」

「あの文字って一般に知られているものなのか？…やたらと難しい文字のはずだが。」

「…知られている。古代遺跡なんかでは良く見つかる文字だからな。…古代語と呼ばれている。」

「古代語…」

なんか自分が後期高齢者扱いされてる気がする。

「…私は戻るぞ。明日は早い。」

トワイライトは部屋に戻るようだ。

…俺ももう寝た方がいいかな。

「んじゃ、お休みトワイライト。」

すると、彼女は一瞬驚いたように目を見開いて立ち止まった。

「…どうした？」

「…いや。何でもない。」

そう呟くと、足早に去って行ってしまつた。

…なんだ？

残された俺は、一人首を捻つたのだった。

翌日、俺は悩んでいた。

手には黒ずんだ銅の鍵。

目の前には宿の扉。

正確には、トワイライトの部屋の扉。

「あゝ、トワイライト？」

扉から返事は無い。

耳をくつつけても全く音がしない。

「おーい！起きろよー！」

ドンドン！

強めに扉を叩きながら再び挑戦。

…が、やはり返事は無い。

「いい加減に起きろこの鎧マニアが！」

そう叫んで耳を澄ます。

…目の前の扉の向こうは、完全に静寂を保っていた。

「…どーしろってんだよ、俺に。」

ひとしきり現状を嘆いた俺は、こんな厄介な任務をイイ笑顔で押し付けてくれた宿のおばちゃんとのやり取りを思い出す。

ーだいたい30分前ー

俺は、珍しく朝早くに目が覚めた。

昨日のトワイライトの華麗なる変身は余程強力なインパクトを俺に与えたらしく、見慣れぬ天井に驚いたのも一瞬ですぐに現状を、というか昨日の出来事を一通り思い出した。

すなわち、ここは俺のいたあの世界では無いということだ。

客観的な意見としては、ここは慌てるなり悲しみ嘆くなりせっかく

だから是非ともトワイライトの胸に飛び込んでみたりするところなんだろうが、そういう気持ちは無い。

全て納得した上であの世界を後にしたかのような僅かな郷愁の念があるだけである。

いや、トワイライトの胸には飛び込んでみたいが。

…彼女の胸に飛び込んだところで受け止めてくれるのかは別の問題だろうけど。

……無理だろうなあ。

自分で考えて自分でへこんでしまった。

とにかく、健康的に早起きした俺は食堂である共用の大部屋に顔を出してみる事にした。

だいぶ年季の入った感じの木戸を開け、中を覗く。

「あ！お客さん、ようやく起きたのかい。何だ眠そうな顔してるけど…昨日はお楽しみだったのかい？」

いきなり宿のおばちゃんに声をかけられた。

そこそこ広い食堂はがらんとしていて、おばちゃんだけが暇そうに座っている。

…今は楽しそうにニヤニヤしているが。

「まったく…邪推だつての。個人的にはあんな美人なら大歓迎だけ…」

あれ？

「おばちゃん、あいつと知り合い？」

すると、ニヤニヤしていたおばちゃんがぎよんとした表情になった。

「え？いやいや初対面だよ。」

「何であいつが女だつて知ってんの？鎧脱がなかったら、あいつ。」

俺の質問を聞いたおばちゃんはニヤニヤを復活させた。

「ああ、そのことかい。なに、あたしくらになれば細かい仕草とか歩き方でわかつちまうんだよ。性別くらいはね。」

「そりゃ凄い。おばちゃん、朝飯つてでるの？」

「できてるよ。今食べるかい？」

「よろしく〜。」

料理はすぐに運ばれてきた。

パンにスープ、まあ、世界観から考えて妥当だろう。

「（モシヤモシヤ）…ん、そうだおばひゃん。」

「食べてから喋ったらどうだい。ま、今はあたししか居ないから構わないけどね。」

「…ンツ…トワイ…あいつはまだ寝てるのか？」

「…本当に何も無かったのかい。まあいいさ、そつだ、朝飯食べてないのはあのお姉ちゃんだけだし、お客さんが持って行ってあげてくれるかい？部屋の鍵は…あった。ほら。」

「ん、まあいいよ。」

くそして現在く

…嗚呼、あ那时的俺よ。

なぜ軽く承諾したんだ。

知り合ったばかりの女性の寝てる部屋に無断侵入するブレイブハートなんて俺が持っているはず無かるつ。

「…ああくそどうすればいいんだー！！」

「やかましいー！」

派手な音を立てて目の前扉が開く。

驚いて後ずさった俺を、寝起きを感じさせない紅い瞳がギロリと睨

みつけた。

「…何の用だ？」

「あー、朝食お届けに参りました。」

「そうか、ありがとう。食べたなら行くからお前の部屋で待っていてくれ。」

全く抑揚の無い平坦な声で礼を述べ、俺から食器を受け取るトワイライト。

「はい。」

よく考えると、明らかに下男、もしくは従者的な立位置の俺なのだ。
った。

Chapter 7

俺が自分の部屋で天井の木目を数えていると、ガンガンとやたらうるさいノックの音がした。

「どーぞ。」

と言うと、入って来たのはやはり全身鎧に兜までフル装備のトワイライト。

…お前はこの平和な宿の一室で何と戦うつもりなんだ。

俺か、俺なのか？

とまあ冗談はさておき、ツカツカとやってきたトワイライトは俺の前に立った。

「…済まない。待たせたな。」

「いんや、別に大丈夫だ。」

「…そうか。それなら…お前は何をにやけている？」

「いや、やり取りがデートみたいだなんて。」

「……………」

殴られた。

当然鎧付きだ。

「…暴力は良くないと思うんだ。」

「…お前がたわけた事を抜かすからだ。今回は私にとって利益が大きかったから多少の譲歩として顔を晒しただけだ。…私を女として見る事は許さんからな。」

「…了解。気をつけます。」

「フン…：ならば行くぞ。まずはお前の現在の实力を見る。」

「実力？」

「…無論、戦闘能力だ。生きていく術を教え込むという契約だから道は色々あるが、土地も商売の元手となるまとまった額の金も持たないお前がなれるのは冒険者くらいのもものだからな。」

…まあ、そうなんだけどさ。

「で？ここで何をすればいいんだ？」

太陽が本格的に登った頃、俺たちは街の外の荒れ地にいた。

現状俺たちが拠点としている開拓街「アドウェル」は、その四方を

荒野に囲まれている。

ポツリポツリとねじくれた灌木が生える他は、あまり生物の気配を感じない寂しい土地だと思う。

街壁の四方位にそれぞれ存在する大きな門からは割とわかりやすく作られた道が伸びていたりするが、（そしてそこならば大きな荷物を運ぶ商人たちで賑わっているが）道から外れて少し歩くと今いるような荒地になってしまう。

アドウエルが「開拓街」たる由縁でもある。

「…ふむ。とりあえず、カゲマツ。お前が持っている武器があっただろう。」

「ああ、これな。」

トワイライトの言葉に《古ぼけた不思議な木製弓》を取り出すと、彼女に向かって構えてみる。

「…射ってみる。」

「わかった。それじゃあ……あ。」

大事な事を忘れていた。

「…どうした？」

「いや、あのさ……」

非常に申し訳無いのだが。

「……矢、ある？」

「…は？」

「しばらくお待ちください」

「…このど阿呆めが。弓を持っているのに矢が無いなどどんな間抜けだ。」

「悪かった、悪かったって。キャラ変わりかけてるから。」

「いったん街に引き返し、矢を買ってくるはめになった俺と、何だかんだで付き合ってくれたトワイライト。」

「案外優しいのか？」

「…阿呆め。お前一人を街に行かせてまともな買い物ができるのか？余計な時間を食うのが関の山だ。」

「…どうやって俺の心を読んだ？妖怪鎧女め。」

「……ほう、これから武器を習う師に向かってそのような態度をとるか？」

あれ？怒った？

「待て待て待て待て、俺が悪かったから拳を構える必要はない。」

「…ふふふふ、おかしな事を言うなあ？悪かったなら指導は当たり前だろう？」

「…うっわ何この体育会系的暴力思考!？」

「さあ、準備はいいか？」

「良くない良くない。ほら、今は弓を試しに来たわけだしな。さあ、試してみるか？」

俺は内心びくびくで弓を構えてみせる。

とりあえずの狙いは近くの灌木だ。

「…むう、仕方あるまい。」

トワイライトは不機嫌な声で拳を下ろす。

辺りを入念に見回して人影が無い事を確認すると、頭から引き抜いた兜を脇に抱えた。

普段は隠されているその美貌を露わにした彼女は、相変わらずの不機嫌顔のまま俺に頷いてみせる。

…これは多分、始めろって事だろう。

俺は、了解の合図に手を振って見せたあと意識を弓に集中…しようとした。

…… 実質初めて弓を引く俺が精神集中の方法など知っているはずがあるまい。

左手で弓を構えて、右手で矢をつがえてみる。

こ、こんな感じか？

すると、弓全体が淡く光り始めた。

驚いて矢を放ちかけるが、慌てて保持する。

光は、脈打つように点滅すると矢に向かって収束し始め、数秒後にはまた安定したように光り始める。

よくわからない現象に軽くビビるが、とりあえず害はあるまい。

左手に持った矢を精一杯引き絞ると、目標の木に向かって…放つ！！

俺の手から放たれた矢は。

鋭い音を立てて空を切り裂き。

…目標の灌木の右1メートル離れた空を貫いた。

目標を外れた矢は灌木の更に後方約2メートルの地面に落ち……

ドーーーーーン……！

爆発した。

「…なあ、カゲマツ。私はどういつ反応をすればいいだろうか？」

「笑えばいいと思うよ。」

「…そうだな。」

あの時、俺とトワイライトの心は確かに一つだった……

「…妙なナレーションを入れるな。さあ、説明してもらっぞ。」

「んなこと言われても…自分でも謎現象ってのが正直なところなんだが……」

「…もう一度だ。」

「ああ！」

「。ぬすむじゆん。……」

「……いや、いい。……カゲマツ、弓は止めような。」

「……まだやるか？」

「……。。」

ドーーーーーン！

「……しゅん」

「……次だ！」

ドーーーーーン！

「応！」

「……次。」

ドーーーーーン！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0162z/>

frontier world

2011年12月11日17時52分発行